

第3講

13世紀：鎌倉時代 — 執権北条氏はなぜ将軍になれなかったのか — (1997年度)

次の(1)から(5)の文を読み、下記の設問に答えよ。

- (1) 1203年、北条時政は、孫にあたる将軍源実朝の後見役として政所の長官に就任し、幕府の実権をにぎった。この地位を執権といい、以後北条氏一族に世襲された。
- (2) 1219年に実朝が暗殺された後、北条義時は、幼少の藤原頼経を摂関家から将軍に迎えた。
- (3) 1246年、北条時頼が前将軍藤原頼経を京都へ追放したとき、有力御家人の三浦光村は、頼経の輿にすがって、「かならずもう一度鎌倉の中にお入れしたく思う」と涙ながらに言い放った。翌年、時頼は三浦泰村・同光村ら三浦一族をほぼ全滅させた(宝治合戦)。
- (4) 1266年、北条時宗は、15年間将軍の地位にあった皇族の宗尊親王を京都へ追放した。この事件について、史書『増鏡』は、「世を乱そうなど思いをめぐらしている武士が、この宮に昼夜むつまじく仕えている間に、いつしか同じ心の者が多くなって、宮自身に謀反の意向があったかのように言いふらされたものだろう」と説明している。
- (5) 1333年、後醍醐天皇の皇子護良親王は、諸国の武士や寺社に送った幕府打倒の呼びかけのなかで、次のように述べた。「伊豆国の在庁官人北条時政の子孫の東夷どもが、承久以来、わがもの顔で天下にのさばり、朝廷をないがしろにしてきたが、ついに最近、後醍醐天皇を隠岐に流すという暴挙に出た。天皇の心を悩ませ国を乱すその所業は、下剋上の至りで、はなはだ奇怪である。」

設問

- A 鎌倉幕府の体制のなかで、摂家将軍(藤原将軍)や皇族将軍はどのような存在であったか。北条氏と将軍との関係、反北条氏勢力と将軍との関係の双方に触れながら、3行(90字)以内で述べよ。
- B 護良親王は、鎌倉後期に絶大な権力を振るった得宗(北条氏嫡流)を、あえて「伊豆国の在庁官人北条時政の子孫」と呼んだ。ここにあらわれた日本中世の身分意識と関連づけながら、得宗が幕府の制度的な頂点である将軍になれなかった(あるいは、ならなかった)理由を考えて、4行(120字)以内で述べよ。

解いてみましょう（第3講）Aについて

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア

の中で

イ

について書く。

その際に、

ウ

に触れながら書く。

エ

に触れながら書く。

オ 3行（90字）以内で書く。

2 資料と教科書とを照らしあわせる。

(1) アに関して触れている資料は である。

資料中のキーワードとなると考えられる語句をマーカー等でチェックする。

(2) アにあたる部分の教科書（プリント）の記述をマーカー等でチェックする。

(3) イに関して述べている教科書（プリント）の記述をマーカー等でチェックする。

(4) ウ、エの留意点について触れている資料は、 である。

資料中のキーワードとなると考えられる語句をマーカー等でチェックする。

チェックした部分に関する教科書（プリント）の記述をマーカー等でチェックする。

3 チェックした部分を、ア～エの要求に答えられるように並べていく。

4 最後に90字になるようにポイントとなる部分を抜き出して、要約する。

次のページに、空欄に入る語句や該当する教科書のページ・行を記しています。
(推理小説でいうと、探偵が謎を明かしていく部分です。自力で犯人（解答）を当てたい方は御注意ください。)

第3講の解き方 Aについて（詳細） 【 謎解きの部分です 】

Aについて

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア 鎌倉幕府の体制

の中で

イ 摂家将軍や皇族将軍はどのような存在であったか

について書く。

その際に、

ウ 北条氏と将軍（摂家・皇族将軍）との関係

と

エ 反北条氏勢力と将軍（摂家・皇族将軍）との関係

に触れながら書く。

オ 3行（90字）以内で書く。

2 資料と教科書とを照らしあわせる。

(1) **ア**に関して触れている資料は である。

資料中のキーワードとなると考えられる語句をマーカー等でチェックする。

北条氏が執権として幕府の実権をにぎり、一族で世襲した

(2) **ア**にあたる部分の教科書（プリント）の記述をマーカー等でチェックする。

102 ページの 14～18 行

(3) **イ**に関して述べている教科書（プリント）の記述をマーカー等でチェックする。

104 ページの 3～7 行

(4) **ウ、エ**の留意点について触れている資料は、 である。

資料中のキーワードとなると考えられる語句をマーカー等でチェックする。

資料(3)では「有力御家人が、摂家将軍の側であることを明言した」「その有力御家人を北条氏は滅ぼした」の部分。資料(4)では、「皇族将軍が追放された原因は、世を乱そうとする武士に利用された」の部分。

3 チェックした部分を、**ア～エ**の要求に答えられるように並べていく。

4 さらに、90字になるようにポイントとなる部分を抜き出して、要約する。

抜き出したものをまとめる

ア 鎌倉幕府の体制

資料と教科書より

北条氏が

この時期には、ア

イ 摂家将軍や皇族将軍はどのような存在であったか

教科書より

イ

ウとエについて

資料より

「有力御家人が、摂家将軍の側であることを明言した」「その有力御家人を北条氏は滅ぼした」「皇族将軍が追放された原因は、世を乱そうとする武士に利用された」



ウ

さらに、考えたい！

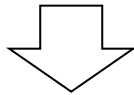
名目だけの将軍なのに、なぜ必要だったのか？

源頼朝は源氏（天皇の子孫）、摂家将軍は摂関家、皇族将軍は天皇家



エ

のために必要であった。



ア

結果、(ので)

イ

が、

エ

のために必要であり、

ウ

解いてみましょう (第3講) Bについて

1 問われている (求められている) ことを確認する。

ア について書く。

その際に、

イ て書く。

ウ

ことにあらわれている意識に注目して書く。

オ 4行 (120字) 以内で書く。

2 資料からポイントとなる部分を抜き出す

(1) Aの設問の答から、将軍に就任したのは、

のような であったことがわかる。

(2) それに対して北条氏は、絶大な権力を持っていても、護良親王が言うように

であった。

※ これでベースとなる部分はできた。

(3) 資料に書かれた護良親王の言葉にあらわれた身分に関わるものをチェックして、

イ を具体化する。

= 地方国衙 (今の県庁) に勤める現地の役人

= 朝廷 (京) から見て東国や蝦夷の人々を見下した呼び方。

↳ 将軍の正式名称は

↳ 得宗家は、本来

次のページに、空欄に入る語句を記しています。
(推理小説でいうと、探偵が謎を明かしていく部分です。自力で犯人 (解答) を当てたい方は御注意ください。)

第3講の解き方 Bについて（詳細） 【 謎解きの部分です 】

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア 得宗が幕府の制度的な頂点である将軍になれなかった理由 について書く。

その際に、

イ 日本中世の身分意識と関連づけ て書く。

ウ 護良親王が、得宗をあえて「伊豆国の在庁官人北条時政の子孫」と呼んだ

ことにあらわれている意識に注目して書く。

オ 4行（120字）以内で書く。

2 資料からポイントとなる部分を抜き出す これを **イ 貴種** という

(1) Aの設問の答から、将軍に就任したのは、

ア 皇族や摂関家 のような **高い身分の者** であったことがわかる。

(2) それに対して北条氏は、絶大な権力を持っていても、護良親王が言うように

ウ 低い身分の出身 であった。

※ これでベースとなる部分はできた。

(3) 資料に書かれた護良親王の言葉にあらわれた身分に関わるものをチェックして、

イ 日本中世の身分意識と関連づけ を具体化する。

エ 在庁官人 = 地方国衙（今の県庁）に勤める現地の役人

東夷 = 朝廷（京）から見て東国や蝦夷の人々を見下した呼び方。

↳ 将軍の正式名称は **征夷大將軍** → 将軍の本来の仕事は何？

↳ 得宗家は、本来 **オ 将軍に征討されるべき夷の系譜**

<KEYWORD> 「家格（かかく）」

貴族(公家)社会において、平安・鎌倉時代を通じて形成された家柄による秩序。例えば13世紀後半（鎌倉時代後半）に、一条・二条・九条・近衛・鷹司の「五摂家」が確立し、以後、この5家以外から摂政・関白は任じられなかった。つまり、中世は、公家社会において家格が確立し、官位と家柄が固定された時代であった。

抜き出したものをまとめる

中世は公家の家格が確立され、官位と家柄が固定された時代であり、

将軍は **ア** のような **イ** が任じられるものとされた。

その身分意識の中で、得宗は **エ** という **ウ**

である上、**オ** と見なされており、将軍になることはできなかった。

視点をかえてみましょう

Bの問題文は、「将軍になれなかった（あるいは、ならなかった）理由」と書いてある。今回はそのまま「なれなかった」理由で答案を作成したが、「ならなかった」＝「なる必要がなかった」という考え方もできる。その背景となるのが「貞永式目（御成敗式目）」という小学校の教科書にもでてくる「最初の武家法典」の存在である。

貞永式目は、「御家人社会（鎌倉幕府の支配範囲）にのみ適用する」ものであったが、次第に広く用いられるようになった。それは、幕府の力が強くなっていったこと以外に、「よくできていた」ことがある。

幕府政治は、合議制とこのよくできた法に基づいて行われており、北条氏（得宗）が政治をとる正当性を主張するために、あえて将軍になる必要もなかったといえる。

まとめ

中世という時代を教科書は「実力で社会を動かそうとする」時代と説明している。しかし、実力主義である反面、

が求められた（必要であった）時代でもあった。